

継子いじめ物語における恋愛

住吉物語の場合

カロリーナ・ネグリ

『枕草子』の「物語は」という段の冒頭には、当時、十世紀末頃に流行していた物語の名がおそらく清少納言の好みの順序に従って列挙されているのである。まだ、着手されたばかりの「源氏物語」の名は書かれていないが、「住吉」および「宇津保物語」とあることから、『住吉物語』は既に広く読まれていたと思われる。したがっておそらく、紫式部も自分の創作のために先行作品、いわゆる「古物語」としてこれを参考にしたと推測できるだろう。実のところ、『源氏物語』の「螢」巻の中で、光源氏が明石姫君のための絵物語を選定する場面で「継母の腹きたなき昔物語も多かるを」と口にして、同じ「螢」の巻では玉鬘が自分の「さすらひ」と『住吉物語』の姫君の流離を比較するのである。

ところが、『枕草子』や『源氏物語』に引用されている『住吉物語』自体はすでに散逸していて、残念ながら今日では読むことができない。清少納言や紫式部が読んだテキストは、十世紀に成立した「古本」と言われるもので、日本版シンデレラ物語である。鎌倉時代に、古本から改作されて現存する『住吉物語』が生まれたのだが、基本の筋は殆ど変わっていないと考えられている。しかし、現存本には百種類もの異本があり、その中ではどれが元で、どれがそこから派生したのか容易に親子関係を特定できないのが実情である。おそらく口承物語の深い痕跡を示している『住吉物語』の現存本の場合には、ある程度まで読者が作者となって、だれかに伝わった物語の部分を好みのままに書き換えたのであろう。ただし、現存本における書き換えは、物語の筋の展開にまでは及ばず、挿話を加えたり文章を書き換えたりという段階にとどまっているらしい。

その多様な伝本の中で、桑原博の研究によって鎌倉時代に（おそらく『無名草子』の成立と『風葉和歌集』の成立の間に）遡る『住吉物語』の現存本の原型にもっとも近いと考えられる甲南女子大学蔵本を元にして、『住吉物語』を継子苛め物語というよりも、むしろ恋の物語として考察していきたいと思う。

『住吉物語』は、十世紀後半に流行した『落窪物語』と同じように、継母による継子の虐待、継母からの逃亡、継母への復讐、結婚、そして幸福な生活という経緯を語っているが、この二つの作品はきわめて類似点の多いことでも有名である。その反面、『落窪物語』は即物的描写と言われ、それに比べて『住吉物語』は叙情的描写が多いと言われるなど、対照的な面も見受けられる。

ところで、物語の構造分析の観点から見れば、この二作品は継子いじめの単純な基本構造に継子を救う男主人公を登場させることで、「婚姻譚」の要素を加え、「色好み」という王朝物語の主流テーマに膨らませている。私たちはこの点に注目すべきだろう。特に『住吉物語』の場合には、『落窪物語』と違って、継子いじめ譚を、継母の虐待の部分と継母への復讐の部分の二つに分割し、その間に、おそらく屏風絵物語と言われる作品の影響に従って、正月から十二月までの四季の移り変わりを描く恋の歌が収められていることを見逃すことができない。やはり、継子いじめ譚は通過儀礼に密接に結んでいるので、成年式によって子供として死んだのち、結婚または出産できる大人として再生した少女たちを魅惑するために、恋の物語を挿入しているのである。そして、継母の虐待は通過儀礼の障害を象徴し、物語に登場する理想的な男主人公は重大な危機を切り抜けてきた女主人公に与えられるべき褒賞になっていると考えられるのである。

『住吉物語』には『落窪物語』には見られない実母の死による夫婦の離別の場面が語られていて、そこで生母の遺言が引用されているのである。その遺言によって実の母子関係の密接さを描くと共に、姫君の将来の苦難を想起させるわけである。

生母は、

われ、はかなくなりなむのち、この姫君の事はあはれなれ。なからむ跡なりとも、なみなみならむ有様させ給ふな

よ。いかにもいかにも、内裏へ奉り給へ。あの姫たちにおぼし劣らすなよ。

と泣きながら言っている。そして、父中納言はこの遺言に基づいて姫君の内参りを計画するが、継母は中納言の行動に反対して、継子姫君を通してその背後にある亡母に対する嫉妬を表す事が可能となる。

そして事件は母の死をもって始まる。もちろん継母は実母の死によって生ずるものであるが、その時の姫君の年令こそが、注目すべき一つの問題となる。

姫君は八歳の時、母を失ってしまう。そしてしばらくの間、死んだ母の代わりをする乳母のもとで育てられるが、十歳の時、中納言の邸に引き取られて、その時から継母の虐待が始まる。

そしていま一つの問題は、継母の虐待の開始が求婚者の現われた時と一致するという点である。実際、既に関敬吾が指摘しているように、平安時代には十二歳から十四歳までが女子の成年式にあたり、この時に初めて裳を着ける儀式が行われていた。そして、十歳ぐらいの女主人公にとってはこれから大人の社会に入って理想的な男性が現われた時に、妻、または母として新しい人生が始まると考えられるのである。年令がいくつであったかということは、女主人公についての重要な情報になるため、『住吉物語』における継子譚を分析する際には、それに密接に関わる婚姻譚も避けて通れないと思われるのである。

それでは求婚者少将と遺言の関係はどうであろうか。

少将が結婚の相手を探していた時、下仕の筑前から姫君の噂を聞いてまだ見ぬ恋に憧れる。実は、平安貴族の結婚は、男が女の噂を聞き、会ったことのない女に恋をすることから始まる。男が女の顔を見ることなど、ほとんど不可能であったからである。平安時代の女は、家族以外の男に顔を見せない。宮廷でも、女は絶えず物陰に隠れ、人前に出る時は御簾や几帳などで顔を隠し、男に顔を見せるということは、結婚をゆるしたも同然である。そこで男は噂の女の情報を集める。美人であるか、教養はあるか、気立てはどうか、財産はどのくらいか、家柄はどうか、等々である。

現代では信じがたいかもしれないが、平安の男達は、女を直接に見ることができなかつたので、噂の女に恋をし、恋文を書いていた。男と女が身体的に離れていた時代では、誰かに何かを知らせるために手紙が大事な役割を果たしていたに違いない。言葉はある人物の存在を承認して、歌で自分の感情を伝える能力がなければ、異性の心をとらえることができなかつたと思われていた。

昔は、日本語で「手紙」は「文」と言われていた。「文」の元々の意味は「跡」、つまりある場所に誰かが残した、そこに何かあった事の印だと考えられるのである。従って、手紙は見えない人の「跡」、あるいは代用品、さらに盲目的崇拜対象とさえ思われていた。筆跡は手紙を書いた人の性、年令、地位、好みを暗示して、手紙を受け取った人の性欲を刺激させるのである。紙の品質、手紙に添えて送る贈り物なども見えない人の教養、感情性の「跡」になっていたので季節、または状況に合わせて選ばなければならなかつたのである。

平安時代の社会の成立と男と女の恋愛に関わる習慣を描く『住吉物語』の中では、少将は十月の頃、初めて姫君に歌を送る時に、紅葉重ねの薄様の紙を使って、

初時雨今日降りそむる紅葉葉の色の深きを思ひ知れとぞ

と書いて筑前に与えた。『古今集』の中では秋の景色が人間の悲しさや寂しさをよく例えているが、ここで紅葉の深い色が少将の思いの深さを例えていて、これから男と女の間が始まる恋愛関係を暗示しているのである。しかし、経験のない若い姫君からは、返事がなかなか届かない。そこで少将は、筑前と相談してから、改めてこのように恋の歌を書く。

浜千鳥跡ばかりだに知らねどもなほ守り見む潮のひるまを

これは姫君に会いたくてたまらない少将の、姫君に対する憧れを歌っている歌だが、少将の思いが相手の姫君に通じないので、さらに語り手は、

行く水に数書く心地して、御返事なし。

と聞き手に知らせるのである。この言葉を聞くと、あるいは読んでみると、私たちは『古今集』、または『伊勢物語』に収められている有名な歌、すなわち、

行水にかず書くよりもはかなきは思わぬ人をおもふなりけり

という「合わぬ恋」の歌を連想することになる。やはり口承物語の単純な筋を示している『住吉物語』は少将の心理描写を省略しているが、この、「行水に」というのは、おそらく平安時代から鎌倉にかけて、こうした片思いの気持ちを表す成句として、一般に広まっていたため、少将の気持ちを聞き手に伝えるうえで、たいへん効果のある言葉だと思われるのである。

さて、少将は中納言の邸に姫君が引き取られたことによって継母の「たばかり」にあり、三の君の夫になってしまうが、そのことによってまだ見ぬ恋に憧れていた姫君自身の姿や琴の音・声などを身近に見聞きできるようになる。これによって少将は姫君のことをいっそう愛しく思う。そして、冬の初め頃に、

白雪の世にふるかひはなけれど思ひ消えなむ事ぞ悲しき

という歌を書き、それから、

かかる身は消えも消えなむ白雪の世にふればこそ憂き目をも見れ

という歌を書いて姫君に送る。ここでは雪は季節の象徴になっているが、同時に、「合わぬ恋」の空しさを例えているのであろう。

冬が終わって春が始まる。そして姫君は中の君と三の君と連れ立って春の風景を眺めるために嵯峨野へ行くことにする。少将はその噂を耳にして嵯峨野へ先に行き、松原の蔭に上手に隠れる。そして、かろうじてやっと遠い所から姫君の美しい姿を眺め、

春霞立ち隔つれど野辺に出でて松の縁を今日見つるかな

という歌を詠むのである。同じ嵯峨野の遊びの場面では、偶然に少将と会った姫君は恥ずかしくて、早く帰ろうとするのだが、少将はもう少し長く嵯峨野にいてほしい姫君に、

初声は今日ぞ聞きつる鶯の谷立ち出でて幾夜へぬらむ

という歌を送るのである。

「霞」と「鶯」は春の季節に限って、日本全土を飾る自然現象であるが、夏になると少将が夏の歌における詠歌の対象とされる卯の花を折って、

つれなさを思ひもらさぬ心こそ身を卯の花と言うべかりけれ

と詠む。または、夏の季節しか使わない菖蒲重ねの薄い紙に、

心ざし深き沼々たづねつつ引けるあやめの跡の根を見よ

と書くのである。

以上のように少将は四季の移り変わりによって絶えず自分の変わらない誠意を表す歌を送るのだが、面白いことに、姫君は少将の求婚を拒否しつづけ、返事をしない場合が多い。実は、少将求愛のはじめより入内を理由に断たれていたが、まして継母の「たばかり」によって知らず知らずのうちに三の君の夫になってしまった以上、その求愛を拒否しなければならなかったのである。そして、物語の中では姫君はよく「人聞き見苦しい」、「人目つつまし」、「世のつつまし」という表現を口にして少将に返事を送らないことにする。平安時代には世間の評判が非常に大事なことだと思われるのだが、よく考えてみれば、この「人聞き」「人目」を避けるのは、古く『万葉集』時代から見られるのである。やはり、恋愛は対の関係の問題であるため、常に社会的に逸脱する可能性を持っている。そこで、さまざまな社会的な制度、禁忌が科せられた。たとえば、恋愛は夜にするもの、人に知られてはいけないものという制度である。

ところが、律令には、結婚のことは記されているが、恋愛の制度は記されていない。これは、恋愛の制度が律令に載るようなものではないことを示している。律令はこの地上における人の地位づけ、役割などを決めるものであるため、そこに触れられていないことは、恋愛が地上的なものではないのだと言える。言い換えれば、社会的な範疇から外れるものなのである。やはり恋愛はきわめて心理的なものであり、歌は個人の心理を社会化するものとしての役割をもっていたのである。しかも、歌はある形に当てはめてこそ歌になる、すなわち様式という社会の共通の了解に基づいている。そして、恋心は、見染めた時、初めて逢う時、共寝したあとなど、さまざまな場面で歌を必要とする。

勿論、宇宙の運行を示す四季歌も恋心を伝えるのに上代から大事な役割を果たしていたに違いない。『万葉集』においては、四季の観念は、雑歌とか相聞とかに結合して自立生に欠けていたが、中古の『古今集』においては、春歌・夏歌・秋歌・冬歌と、自主性を持った和歌の分類へと発展し、日本文学の内部に広大な地域性を保有すると共に、変化に富む季節の性質も自然に所有するものと見なされる。したがって、日本文学の真髄を把握するために季節と土地、すなわち日本の風土と文学の関係を考察することが必要になる。実際はすべて文学作品を叙述する場合、時と場所と人間関係を無視することはできない。ある時、ある舞台上で登場人物が相互の関係において、思考し、情感を燃焼させ、行為し、なんらかの事件を起こす。こうした条件なしには、文学はなり立たないのではないだろうか。

さて、『住吉物語』の中ではいくら少将が求婚しても入内の計画がある限り、受けるわけにはいかない。またその計画が実現すれば、少将の夢が破れるのである。ところが、継母は老翁に姫君を与え父中納言の入内の計画を阻止しようとして姫君を住吉へ流離させ、これが意外にも二人に自由を与える事になる。姫君の行方が分からなくなると少将は深い信心をもって神に祈り、夢で姫君が住吉で暮らしているのを見て、住吉へ姫君を探しに行く。そして、そこで琴の音に誘われて姫君を発見するのだが、もしも住吉で姫君が琴を弾かなかつたならば、彼女との再会もかなわなかつたことだろう。二人の邂逅にとっては長谷観音の靈験だけでなく、琴の靈力も大きいと言えるのである。『住吉物語』において琴の才は皇族の血筋と光輝の美とともに姫君のヒロイン性を示しているが、姫君にとって、琴は母の形見であり、琴を弾く事によって靈界との交流が可能となるのであろう。面白いことに、姫君が琴を弾くのは決まって秋と冬、つまり哀感を漂わせる季節である。そして、読者は姫君の琴の音に、母を失った継子の嘆きと悲しみを聞き取らなければならないことになる。

一方、少将にとって、琴は結婚相手を摺り替えた継母の「たばかり」を発見させる機能として、また住吉における邂逅を可能にするシグナルとして、二度も重要な役割を果たしている。琴は、実母の靈の変型として姫君と少将を結ぶ見えない構想の糸である。したがって二人が結婚して幸福を得てからは、姫君はまったく琴を弾かなくなってしまう。

『住吉物語』の中で扱われている「継子譚」は既に三谷邦明が説いているように穀物の豊饒を祈る祭祀や成年式に見られる死＝再生の儀礼を媒介、背景として生まれた話形である。穀物の豊饒を祈る祭祀は前進的な時間の観念というより、むしろ周期的な経過を持つ時間の観念を示すものである。原始時代の社会では昼夜平分時と至は一年間の太陽の動きを指示し、田畑で働いていた人々にとってはそれぞれの季節によって異なる気温、天候、などを理解するのに大事な方法だった。世界中どこでも、四季の一巡は絶えず死と再生、あるいは不結実と産出力、または、悪と善の永遠の戦いを暗示するのである。

『住吉物語』の物語構造分析という観点から見れば、継母の虐待は不結実な冬、つまり老年・死・悪を象徴する。一方、理想的な男性との結婚は産出力のある春、つまり青年期・生命・善を象徴すると考えられるのである。そして

『住吉物語』の場合には物語の中に取められている歌だけではなく、物語の構造も原始時代の穀物の豊饒を祈る祭祀に見られる四季の周期的な経過を反映すると言えるのである。

『住吉物語』は恋路の障害になる恐ろしい継母の計略、そして姫君と少将がどのようにその障害を超えて幸福な結婚によって姫君の生母の遺言を叶えるのかを描いている。この遺言が物語の基底となって、実母・継母対立は一夫多妻の当時の社会からの妻同志の争いが継子苛めの原因であるとされ、実母も継母も、母である事と共に中納言の妻である事が重要視されている。

昔、中納言にて左衛門督かけたる人おはしけり。御前二人をかけて通ひつつ、住み給ひける。一人は時めく諸大夫の女なり。その腹に姫君二人おはしける。

今一人は古き帝の女にて、なべてならぬ人におはしけり。

と物語の冒頭に書かれている。「なべてならぬ人」というのは姫君の生母である妻を指しているのだから、その妻こそ中納言にとっては、大事な存在になるのだということを暗示するのだろう。

すでに胡潔が論じているように、女流日記と物語類に見られる平安貴族の考えにおいては、妻が必ず一人という観念が欠如しているため、正妻「北の方」が他の妻達と比べて、優位な婚姻関係に入ったといっても、必ずしも不動な地位にあるとは言えないのである。中国の伝統社会と違って、当時の日本における多妻婚は、妻が一人で、外は妾であるという婚姻形態ではなかったからである。多妻が許される社会通念のもとで、正妻が他の妻と並立されたり、あるいは新しい正妻にとって代わられたりする場合もあったと考えられるのである。

貴族の妻達は別々の所に住み、それぞれ個人的な生活を営んでいた。男はいくつかの女性の所に通って行き、通っているうちに妻の家の権勢、妻の所に子の有無、または妻に対する愛情など諸要素によって正妻を決めていたと思われるのである。それに従って妻同志の間では競争が起こりやすいし、一人の妻の地位がいつまでも相対性なままだったと言えるのである。

妻問婚の社会にあつては、女の実家が重要な力を持つ。子供達は女の所に生まれて女の所で育てられている。母に早く死別し父が他の女の家へ婿入りし、そこへ引き取られねばならないような運命におかれた女の子は悲惨である。もちろん実際には、父に引き取られ、恐ろしい継母と暮らす例はあまりなく、母方の祖父母と叔母たちに引き取られて暮らすほうが常である。しかし、母が死んでしまえば、残された女の子は死んだ母の代わりとして父の他の妻と闘わなければならない場合もあったと考えられるのである。そして、皇族の出である『住吉物語』の姫君に対しても、生母がいなければ哀れなものだ、という同情が寄せられたにちがいない。物語では、姫君が素晴らしい男性にめぐりあい、幸福な結婚をするのだが、あくまで物語だからそうなるのであって、実際には、結婚もせず一生埋もれて暮らす女性も多かったと思われるのである。

考えてみれば、おそらく継子物語という作品は平安時代の一夫多妻制度に起因する女性の競争、不安、そして悩みを明らかに反映していたため、当時には特に流行していたのだと言えるだろう。

以上、これまで見て来たように、継子流離、姫君と少将の恋愛、または中納言と二人妻の関係を描く『住吉物語』は三重構造を有する物語と言え、継子苛め物語というよりむしろ恋の物語として考察できるのである。実のところ、物語の冒頭から中納言の二人妻は対立して、今も昔も相変わらず愛情から自然に生まれた嫉妬によって姫君の物語が始まるのではないだろうか。

参考文献

- 1) 秋山虔『源氏物語の女性たち』小学館ライブラリー、小学館、1991年
- 2) 市古貞次『中世小説の研究』東京大学出版会、1955年
- 3) 市古貞次・松田武夫・麻生磯次『日本文学概論』秀英出版社、1968年
- 4) 板垣直樹「住吉物語試論－遺言の働きを中心に－」『国文学試論』1983年3月9号
- 5) 大槻修・神野藤昭夫 編『中世王朝物語を学ぶ人のために』世界思想社、1997年
- 6) 桑原博・室城秀之『零にこる・住吉物語』中世王朝物語全集11、笠間書院、1995年
- 7) 胡潔「平安貴族の正妻制とその実態－正妻の呼称の「北の方」の成立と使用を通じて－」お茶の水女子大学『国文』1997年1月86号
- 8) 胡潔『平安貴族の婚姻慣習と源氏物語』風間書房、2001年
- 9) 後藤祥子 編『王朝和歌を学ぶ人のために』世界思想社、1997年
- 10) 関敬吾「婚姻譚としての住吉物語－物語文学と昔話－」『国語と国文学』1962年10月39巻10号
- 11) 中村真一郎『王朝物語』潮出版社、1993年
- 12) 古橋信孝、『万葉集・歌のはじまり』筑摩新書、筑摩書房、1994年
- 13) 三角洋一『物語の変貌』若草書房、1996年
- 14) 三谷邦明「継母子物語の系譜－受容と文学あるいは古『住吉』から『貝合』まで－」、三谷邦明 編『物語文学の方法1』有精堂、1989年
- 15) 三谷邦明「継子もの－世界と日本－」『国文学解釈と鑑賞』1974年1月1号
- 16) 山口博『王朝貴族物語』講談社現代新書、講談社、1994年
- 17) 吉海直人「住吉物語の琴をめぐって」『国学院雑誌』1982年7月83巻7号
- 18) Bowring Richard, *Murasaki Shikibu. The Tale of Genji*, Cambridge, Cambridge University Press, 1988
- 19) Craig Mc Cullough Helen, *Brocade by Night – Kokinwakashū and the Court Style in Japanese Classical Poetry –*, Stanford, Stanford University Press, 1985
- 20) Frye Northrop, *Anatomy of Criticism. Four Essays*, Princeton, Princeton University Press, 1957
- 21) Ong Walter J., *Orality and Literacy. The Technologizing of the Word*, London and New York, Methuen, 1982
- 22) Shirane Haruo, *The Bridge of Dreams – A Poetics of The Tale of Genji –*, Stanford, Stanford University Press, 1987